ICT 海外ボランティア会会報
第 111 号

2023 年 11 月 27 日（月）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
ゼロからのソフトづくり余話(その 3)　当会特別顧問　石井　孝

◆JICA の動き
JICA 海外協力隊 2023 年秋募集　事務局

◆海外グラフィティ
「イーハトーボの劇列車」を観て
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

◆海外便り
やどかり族の中国俳柳紀行序章(6)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之

◆メッセージリレー(4)

◆第 21 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様　事務局

特別寄稿

ゼロからのソフトづくり余話(その 3)

当会特別顧問　石井　孝

本誌第 103 号に、ソフトウェア開発の経験が全くない素人集団を率いて、100%外注に頼っていた基幹のソフトウェアを内製に切替えるプロジェクト、特に IGS プロジェクトに取り組んだことを記した。IGS とは、NTT と同時に生まれた新電電会社と NTT の市内網を接続するゲートウエーのことである。今回は、まとめとして日本のソフトウェア開発について筆者なりの考えを述べたい。

コンピュータは社会システムのあらゆる所に広くかつ深く浸透しつつある。これに伴いソフトウェアは空気や水のように人間の生活に欠くことができない存在になっている。今後、社会システムひいては、カルチャーそのものが「ソフトウェアオリエンテッド」になっていくであろう。このためソフトウェアには、安全性を含めた高い品質が求められると同時に、開発と保守の即応性と価格に対する要求が極めて厳しくなってきている。

昨今におけるソフトウェア開発環境の変化をいくつか挙げてみよう。
①顧客の浮動化。かつての資本系列を基にした顧客の固定化は崩れた。価格や保守体制など実利的なつながりによってソフトウェア開発は発注されるようになった。
②市場のグローバル化。ソフトウェア先進国からのパッケージソフトウェア商品が輸入されている。労働コストが安く技術力に優れた開発途上国のマンパワーも参入している。
③不安定で予測困難な市場。既存システムの拡大と見直しを同時進行させるケースが多く、従来の延長線の仕事は考えにくい。
④開発期間の大幅な短縮化。インターネット技術の急速な進展を契機に、開発期間と要求価格は短縮と激減の傾向を強めている。
⑤安定性の要求。システムダウン、セキュリティ対策強化など、高度の信頼性が必須である。
⑥行動規範の多様化。コンテンツ活用にかかわるソフトウェア著作権の問題など、従来より広範な目配りが要求される。

このように考えると、コンピュータを利用する企業、コンピュータメーカー、ソフトウェア開発会社などはそれぞれの立場から、自己のソフトウェア戦略を改めて問い直し、ソフトウェアを真に自らの糧とするには何を、どうすべきかについて、一人称で考える必要があるし、また考えざるを得ないであろう。

とりわけ安易な外注体制に依存するソフトウェア開発体制、事業主体そのものと言えるシステムのアウトソーシングなど、再検討すべき重要な問題がある。

昨今における日本のソフトウェア開発の状況を概観すると、請負中心の外注体制が当たり前になっている。一次受注会社は、丸投げに近いかたちで下請けに仕事を委ねる。実際仕事を行う下請け会社は、人材派遣を主とする会社であるか、コストの安い外国企業の場合が多い。これでは、国内企業の中に技術が蓄積され、これが熟成し発展していくとは考えられない。まさに空洞化そのものである。現在並行して進行しているハード産業の空洞化現象とは異質であって極めて危険な姿である。

色々苦労を重ねてでき上がった NTT の内製体制も、日本のソフトウェア開発状況を覆う安直な外注化の潮流に押し流されたかのように、現在は見る影も無い状態になってし

まった。NTT グループはかつてのソフトウェア開発丸投げの体質に戻っている。
ただし、私は悲観していない。ゼロからであっても、ソフトウェアづくりの体制を築くことは可能である。やり直すことも必ずできる。
戦後の日本は、荒廃の中から世界に冠たる工業技術を築き、ハードを主体としたものづくりにより経済大国となった。これは、国民性の中に細かい技術を磨き、蓄積し、総合化する DNA を有する証左と言える。この特性はソフトウェアの開発に求められる要件とまったく同根であることが、実際にやってみるとよく分かる。
ハード産業も下請けを使う階層構造になっているが、下請けを担当する中小企業は組織的にまとまった仕事を受け持ち、自己の仕事に対し自前で技術開発を行い、これを基にその後大きな付加価値をつけ、独自の発展を遂げているケースが多々存在している。ソフトウェアもそうなってほしいし、そうあるべきである。
それには根源の発注者から姿勢を改めるしかない。重要なソフトウェアを責任を持ってつくり上げる内製体制があってこそ、ソフトウェア開発産業と健全な関係を築ける。ソフトウェアを事業の中心に据えるものは自ら開発経験を積まなければならない。

JICA の動き

JICA 海外協力隊 2023 年秋募集

事務局

JICA 海外協力隊 2023 年秋募集の募集期間は 12 月 11 日(月)正午までです。募集案件は下記サイトのとおりであり、奮ってチャレンジしていただければ幸いです。
シニア案件： https://www.jocv-info.jica.go.jp/sv/?m=BList
一般案件： https://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/?m=BList

また、JICA 主催の説明会が通年で全国各地及びウェブで多数開催されていますので、ご関心のある方は参加されることをお勧めいたします。
https://www.jica.go.jp/volunteer/seminar/

海外グラフィティ

「イーハトーボの劇列車」を観て

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

一世を風靡した映画界の風雲児、角川春樹のキャッチコピー「読んでから見るか、見てから読むか」ではないが、先日、井上ひさしの「イーハトーボの劇列車」を観たあと、新潮の文庫本も読んだ。舞台は、青森発上野行き急行列車だ。車掌や様々な背景を背負った乗客の物語であるが、取り上げたエピソードは、筑摩書房発行の宮沢賢治全集全十四巻からピックアップしたという説明もあった。自身，賢治マニアでもあり、書庫を探ると、実に、第十五巻「書簡集」があった。

前口上から始まるが、ここでは、良く言われる賢治の多面性が説かれる。朝は宗教者、夕べは科学者、夜は芸能者という農夫だ。ケチャダンスで有名なバリ島の農民を或いは想定していたのかもしれない。

本編に移るが、井上ひさしは、原作を現代風にアレンジしている。例えば、「①コカ・コーラの自動販売機などなくとも②イッセイミヤケやハナエモリなどなくとも」と置き換えて表現している。文字の芸術である文学は、その時代の言の葉で表現しなければ、確かに訴えないのだ。賢治の原作を読むよりも、もっとストレートに賢治の人間性を浮き彫りにしたというのが正直な印象である。

ゴッホと同じく、生前は全くと言ってよいほど作品は売れなかった。これもゴッホの場合は、テオという弟がいて初めて世に出た。賢治の場合は、弟の清六さんの存在がある。賢治の苦悩は最大のものは、家業の「古着屋兼質屋」の後を継ぎたくなくて、モノづくりの農業に本当は没頭したかったようだ。そして、今でいう、SDGs や動物愛護の考えに近い。肉食を嫌い、菜食主義のようだ。ものを単に右から左に流して利を得る金融業者や商社員を嫌うのはそこから来ているし、そもそも、家業の古着屋兼質屋もそのたぐいである。劇中、一橋大学（旧東京高商）出の商社員（三菱）や、野生動物を打って生業とする猟師などは最も唾棄すべき人種なのかもしれない。だから、劇中猟師を登場させているし、自身、ステーキを食べるごとに「南無妙法蓮華経」と唱える。父親は、浄土真宗、本人は日蓮宗。この信仰上の対立は、家業を継ぐかどうかとう葛藤にもまして溝は深かった。

合計９回の上京のうち、４回を取り上げているこの作品、自身の賢治研究に大いに参考になった。因みに、タイトルの「イーハトーボ」とは理想郷という意で、賢治が一時夢中になったエスペラント語のようだ。（2023.9.20 了）

海外便り

やどかり族の中国俳柳紀行序章(6)

（1996 年 8 月 3 日～同 25 日）

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

8 月 14 日(水)

楽山からデラックスバスで、とは言っても普通のバスに毛の生えた程度の、時々床から水が溢れ出てくる如何にも今の中国らしいバスであった。約 4 時間、再び成都に来る。前と同じ YINHE DYNASTY HOTEL で旅装を解き、さっそく五代十国動乱期に前蜀を打ち立てた王建の墓を訪れる。こじんまりした墳墓内の陳列品は、それなりに歴史的遺物として価値あるものと思われるが、すっかり「成都の茶」の虜になった我々は、奥まった庭園の木陰に例の竹製のテーブルとイスを引っ張り出し、自然のティールームを心ゆくまで愉しむことにした。ここは受付で茶葉の入った湯飲み茶碗と、湯の入ったポットを貰って好きな場所に行き、セルフサービスで勝手に純喫茶するシステムであった。のんびり時の経つのを忘れていると、閉園時間の午後 5 時が近づいていた。そのままホテルに戻る。

8 月 15 日(木)

ホテルから約 2.5 ㎞歩いて武侯祠に行く。武侯とは諸葛亮の諡号、ここには主君劉備とともに蜀漢時代の逸材が顕彰されている。まさに三国志の世界である。成都を離れる前の一仕事を終えてホテルをチェックアウト。YINHE DYNASTY HOTEL から直接空港まで行かず、まずタクシーで岷山飯店まで 21 元、そこからミニバスに乗り換えればあとは 5 元/人で済む。通しでハイヤーを使うと 20～30 倍は掛かるだろう。熟年やどかり族のゲルピン旅行はきめ細かく行かにゃならぬ。成都発 14:30、重慶着 15:30(SZ4422 便)で同じ四川省内を移動する。ところが搭乗手続きを済ませ指定された待合室で待っていると、本便はエンジントラブルにより出発が遅れるとのアナウンスがあった。30 分、1 時間待っても一向に飛び立つ気配がない。当初 50～60 人もいたはずの旅客がだんだんと姿を消し、待合室の中は大分寂しくなってきた。日本人も何人かいたが、今残っているのは大阪から来た年配のお医者さんと我々だけになった。彼はときどき単独で中国内を旅行した経験を有する人で、「中国では予定した飛行機が遅延し欠航することはよくある。特に乗客の少ない時はエンジントラブルと称して急にフライトをキャンセルすることがある」と言う。今回の場合も修理が終わるのは明朝になるかもしれないから、そろそろ食料を確保して空港で一夜を明かすことも覚悟せねばなるまいと脅かされる。そう云えば待合室にはもう数人しかおらず、その内の中国人家族はカップラーメンを買い込んで腹ごしらえをし始めた。その少し前には航空公司の小姐が水ボトルを配りに来たので、出発遅延のお詫びの印にしては少々お粗末ではないかと囁きながら、我々も一本ずつ貰ったばかりである。重慶のホテル代は払い込み済みだが、これは諦めるにしても、明晩は三峡下りのため乗船しなければならない。ままよ明日中に重慶に着けばよいではないかと思いながら、つのりくる不安に我慢できず、しばしば空港インフォメーションカウンターに飛行見通しを尋ねる。最初のうちは何時飛行可能になるか分からないの一点張りで、急ぐ場合は成都市街に戻りバスで行ってくれ、そうすれば重慶まで 4 時間で行けると言う。私の知るところでは、成都・重慶間は約 250 ㎞、列車で 10 時間、バスだとまともな道路がないのでそれ以上の時間が掛かると認識していた。カウンター嬢の言には狐につままれた思いが強く、なかなか搭乗キャンセル・預け荷物返還・バス手配の行動

を起こさせるまでにはならなかった。それにカウンター嬢が午後 6 時頃航空公司から公式見解が出る予定と言うので、大阪の産業医とも相談しそれを待ってみることにした。その時刻になり窓口に押しかけると、丁度今 SZ4422 便はエンジンの修理が終わり飛行できる状態になったという。重慶行きのお客さんは至急搭乗口に集まれとアナウンスがある。待合室にいた中国人家族は食いかけのカップラーメンを手に持ったまますっ飛んで来た。それでも実際に搭乗した客は 20 人もいなかったであろう。多くの搭乗予定者はほとんどバスの方に回っていたらしい。後で分かったことだが、成都・重慶間にはすでに高速道路ができており、バス変更組はカウンター嬢が言った通り確かに 4 時間で重慶に行けたそうだ。ただ、空港・バスセンター間のアクセスや手続き・待ち合わせ時間も入れると、重慶の HOLIDAY INN HOTEL に着いたのは夜の 10 時頃と我々の到着よりも一寸遅い時間になる。それにしても噂に聞いていた中国航空事情の実態に触れ、貴重な体験をさせていただいた次第である。4 時間待たされて我々が乗った 60 人乗りロシア製中型機の右エンジンを見ると、黒い煤が付いたままであった。すっかり話友達になった大阪のお医者さんが、今回の中国旅行でこの区間だけ何故か生命保険料込みの航空券になっていると述懐していたのが印象的であった。

すっかり暗くなった飛行場から民航バスで一旦重慶市街まで行き、そこから再びタクシーで長江大橋を渡ってホテルに着いたのは午後 9 時頃、自分たちで担いでもよかったバッグをボーイが運んでくれたので 1 元渡したらムッとされた。チップが少なすぎたのであろう。誰がしつけたのか知らないが悪い習慣である。

8 月 16 日(金)

この日、大足まで足を伸ばして釈迦涅槃像でも見に行こうか考えていたが、朝のスタート時間が遅くなり、かつ 170 ㎞も走ってくれるタクシーが捕まらず、方針を変えて丸一日重慶市内を探索することにした。日中戦争当時はここが国民党政府の臨時首都で、革命後の発展によって今では四川省の省都である成都を凌ぐ大工業都市になり、かつ中国政府直轄市の一つでもある。揚子江(長江)の上流、三峡下りの起点に当たり水運の要衝でもある。町中は坂が多く自転車は少ない。とは言え市街中心部は人口密集地帯で、人混みの雑踏にもまれながら解放碑、朝天門埠頭など今夜から乗船する三峡下りへの下見をかねて逍遥する。

次にミニバスと徒歩で、日中戦争の頃、中国共産党中央南方局と八路軍事務所の職員住居であった曽家岩 50 号を訪れる。周恩来が起居し毛沢東も出入りした場所である。嘉陵江に面した裏口からは対岸の赤茶けた製鉄所の全景が見える。重慶といえば中国三大火炉の一つと言われるくらい暑い。じっとしていても汗が湧き出てくる。後で確かめたらその日の最高気温は摂氏 38 度、とにかく外を歩き回るのは身体にこたえる。

郊外にある紅岩村に行く。重慶に国民党政府の臨時首都があった頃、ここが中国共産党の代表部でもあった。小高い丘のあちこちに革命博物館や、毛沢東・周恩来・葉剣英等ゆかりの建物が点在する。彼等はこの鄙びた場所で合宿生活を送り、日本軍の爆撃を避けながら国民党との会談を行なった。建物の中には執務室・寝室・医療室・無線室などがあり、当時の緊迫した様子が偲ばれる。博物館には抗日運動と革命の歴史が克明に展示され、50 年以上も前の出来事をしっかり国民の心に植え付ける愛国教育の基地にもなっている。

二両連結の公共バスに乗って再び市街へ戻り、1953 年建築の人民大礼堂に立ち寄る。遠くからも彩色鮮やかな天壇がひときわ大きく目に入る。堂内は全体主義国家に相応しい劇場型空間があるだけだ。人気の無いホールで共産党の大集会を夢想しながら一休みする。

疲れた足に気合を入れ、途中、露店でリンゴを買ったりしてぶらぶらと枇杷山公園まで歩く。そこからタクシーでホテルに帰ったが、タクシーは渋滞に巻き込まれヒートオ

ーバー、ボンネットから白煙を濛々と出す始末、順調に行けば 5 分のところを 30 分以上かかった。おまけに運賃請求はメーターでは 9 元なのに 20 元よこせと言い張る。毅然とはねのけ 1 元チップで 10 元だけ払う。

夜 8 時ホテルロビーで待ち合わせの旅行社の人がなかなか現れない。我々を三峡下りの船着き場まで連れて行ってくれるはずだ。30 分待っても来ないのでホテル従業員の手を煩わせて旅行社事務所へ電話をかける。すると、これから出るのでもう 10 分待ってくれと言う。ところが 9 時になっても未だ来ない。どうにでもなれといい加減諦めていると、9 時半頃になってようやく旅行社の女性が現れた。彼女はあまり悪びれた様子もなく、これからタクシーで船着き場まで案内すると言う。ホテルから乗船までの出迎えサービス料として、すでに香港で 250HK＄を支払い済みである。きっとベンツかロールスロイスで迎えに来てくれるであろうと淡い期待を抱いていた。タクシーで行き着いた先は真っ暗闇の工事現場のような所、船までの僅かな距離を、荷物担ぎのチップ狙いに集まった風体のよくない連中に取り囲まれる。「不要！不要！」を連発しながら彼等を払いのけ、ごろごろした岩場の足元に注意しながら彼女の誘導で船に乗り込む。場所は今朝下見した朝天門埠頭ではなく、スクラップ置き場みたいなスラム街に近い川岸であった。家内とはこんな筈じゃなかったと口喧嘩に発展、狭いキャビンでやけビールを飲み早々とベッドにもぐりこむ。とんだ一日が終わり船内での前泊となる。なお、これらの行き違いを香港に帰ってから Associated Tours Ltd.の鈴木さんに報告したら、送迎料 250HK＄を丸々返してくれた。旅行エージェントのプロとしての矜持からであろう。(次号に続く)

内陸の鉄鋼汚染に煙る街(重慶)

人力でサンパン往来小三峡(三峡)

＜事務局注＞本稿はやや古いが、かえって新鮮であり、切にご寄稿をお願いしたものです。

メッセージリレー(4)

平素より ICT 海外ボランティア会(ICTOV)に多大なるご支援・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。当会ではこのたび、当会会報配信先の皆様から、「私の海外とのかかわりなど」につきまして、当会会報にリレー形式(五十音順)でメッセージをお寄せいただくことを企画いたしました。順番に別途ご依頼いたしますので、ご多忙のこととは存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

お寄せいただきたいメッセージの内容は次のとおりです(全部又は一部選択可、文字数自由、図・写真添付可)。

①今までの海外活動のご経験など
②最近取り組んでいることなど(仕事、趣味、旅行、健康など)
③最近笑ったこと、うれしかったこと、感動したことなど
④ICT 海外ボランティア会(ICTOV)へのご意見など
⑤その他(皆様への呼びかけ、メッセージなど)
⑥お名前(必須)

なお、過去の事例は当会ホームページに掲載しております。
https://ictov.jimdo.com/home/message-relay/

加来 億一

① 今までの海外活動のご経験など

昭和５１年、ISO の国際会議に東大の斉藤忠夫先生の補佐役（？）で米国のフィラデルフィアへ行ったのが私の最初の海外渡航でした。何しろ初めての外国、英会話にも自信の無い私でしたが、なんとか会議を終えた後、NTT（当時は電電公社）ニューヨーク事務所の田代穣治所長をお訪ねしたとき、「初めてなら余り欲張ったことを考えず、アメリカという国が、いろんな意味で如何に大きな国であるかということを実感して帰りなさい。」と言われ、一気に肩の荷が下りた気がしました。その後ワシントン、サンフランシスコ、ホノルルの企業や研究所を訪問し、“アメリカ”を満喫して帰国したことを覚えています。

海外に長期間滞在したのは、タイのバンコクに JICA の技術協力専門家として昭和５６～５８年の２年余り派遣されたときの滞在のみです。バンコク郊外のノンタブリに１０年ほど前から NTT・NHK・東海大学から専門家が派遣された電気通信訓練センターがありましたが、規模的にもレベル的にも大きく発展し、タイ政府は他の同様な施設を統合して大学に昇格させました。それがモンクット工科大学（KMIT）で、JICA の技術協力の成功例として位置づけられていました。

私が派遣された時は、供与機材を見てもコンピュータ・システム、半導体製造装置、発電機と高額で、数次に亘る KMIT への技術援助の中でも規模が最も大きかったのではないかと思います。しかしながら残念なことに、これら設備を搬入設置する建物等の現地側の建築工事が大幅に遅れたり、その間の機材保管状況が悪くて機材の劣化を招いたりしておりました。さらには KMIT から新たな技術協力の追加要望が出されたりして、私の任期が終わるまでにプロジェクト完結とは言いがたい状況になっておりました。私はプロジェクトの延長が必要ではないかと考えておりました。

JICA の技術協力は相手国からの要請がベースになっており、日本側の考えだけでは決定できません。私はカウンターパートである KMIT のゴーソン学長にプロジェクトの延

長または新たなプロジェクトを申請すべきではないかといい、彼も同意してタイの外務省（？）にその申請をしました。私も何度か足を運びました。
しかしながら外務省はKMITに関しての新たな要請を日本側には出しませんでしたので、私は任期終了をもって日本へ帰国することになりました。若干中途半端な形でプロジェクトを終了することになり、大変心残りのすることでした。
後でカウンターパートから聞かされた話では、KMITだけが日本の援助でどんどん発展してゆくことを他の大学が羨望の目で見ており（ヤッカミがあり）、タイの外務省としては、KMITばかり優遇するのはいかがなものかということで日本への要請を見送ったということでした。もっとも、KMITへは数年後に別の形で（要望内容を変えて）援助が再開されたと聞いています。

通信の自由化が始まった昭和６０年に、私は電電公社を退職し、カシオ計算機（以下"カシオ“と略す）に再就職をしました。カシオでは時流に乗るべく、通信機器関連事業を立ち上げてくれということで、あれこれと手を出してみましたが、なかなかうまくは行きません。平成になってまもなくの頃だったかと思いますが、NCC（NTT・KDD以外の新しい通信会社）が始めたページャー事業（NTTのポケベル事業と同じ）が成功し、カシオも端末機器（携帯機器）の開発・製造に成功し、NCCへ供給することで通信機器事業に参入することができました。
ページャーは日本だけでなく、中国や東南アジア等にも普及し、カシオもそれらの国のページャー事業者へ端末（携帯機器）を供給することになり、そのための製造子会社を中国・インド・フィリピンに設立しました。私はこれらの事業責任者ということで、これらの子会社へ度々出張しました。
ご存じの通り、ページャー（ポケベル）は一時的には大変重宝されましたが、携帯電話の普及が始まると、あっという間に姿を消す運命となりました。カシオ本体はページャーに見切りをつけてケイタイ端末の開発に切り替えましたが、海外子会社をどうするかが大きな問題となりました。海外子会社もケイタイに切り替えられればいいのですが、ケイタイ端末の開発製造は人材的にも経費的にもページャーのそれとの比ではありません。国内向けの開発で精一杯のカシオのパワーを海外製造拠点にまで分散することは到底できないと判断せざるを得ませんでした。結局海外子会社を閉鎖するか分離するになり、事業責任者である私が後始末をせざるを得なくなりました。それぞれの子会社の現地側責任者達と厳しい交渉をいたしました。
大変苦労しましたが、一応それぞれ納得させ、カシオとしても大きな損失を出さずに済ませることができたと思っています。彼らを説得させる交渉において、私が考慮したポイントは２点です。
第１点は、あくまでも誠実さを示すことで、変な駆け引きは一切しないと言うことです。まず相手の言い分を良く聞くことにしました。ただ“聞くだけ”ではだめです。”聞くだけ“ならどこかの国の首相でもできます。できるだけ相手の使った言葉を使って、あなた方と同じことを考えているんだということを理解させます。また、条件提示においては最初からギリギリの線を提示します。従ってその後の交渉で、いくら相手から要求されても条件を変える（緩和する）ことはしません。これがあくまでも譲れないギリギリの線であることを強調し、譲歩をしませんでした。
２つ目のポイントは誤解を生じせしめないための努力をすることでした。下手な英語で間違ってはいけないので交渉の場には必ず信頼できる通訳してくれる人を同伴しました。そうして私は彼が間違った翻訳をしないよう、短いセンテンスで、主語、述語、目的語、修飾語のはっきりした明快な日本語で話すよう心がけました。そうして短いセンテンスを１センテンスごとに通訳してもらうことにしました。
このことは重要だと私は考えています。本職の優秀な通訳がいる場合は問題ないのか

もしれませんが、そうでない場合、長々としゃべった後に通訳しろと言われると重要な言葉を通訳し損なう恐れが生じるのではないでしょうか。また、文脈が怪しくなったり、修飾語と被修飾語の関係があやふやになることも多々あるのではないでしょうか。誤解の生じる余地のないようにするのは大変大切なことと思います。
　中国・インドという名だたるタフ・ネゴシエーターの国で、それなりの成果を挙げられたのはこの２点のお陰だったと思っております。

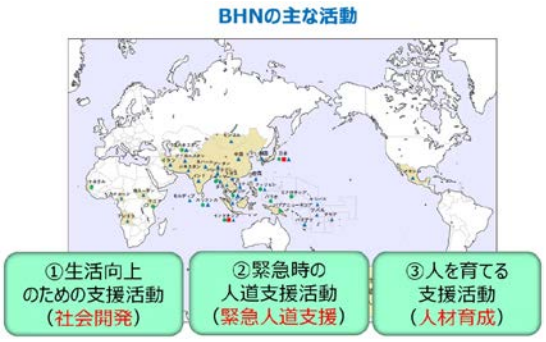
　６９歳で仕事から完全に退き、“悠々とはいかない自適”の生活者になりました。家族（女房と息子）と国内・海外を時々旅行して参りました。（もう行くことはないだろうと思い、過去形にしました）旅行好きの息子は６０カ国以上（南極大陸を除く全大陸）を訪ねたようですが、私はやっと３０カ国前後です。南米大陸にはとうとう足を踏み入れることができませんでした。豪州もオーストラリア大陸には上陸できませんでした。

ウェブサロンの話、あれこれ

第 21 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

　第 21 回 ICT 海外情報ウェブサロンが 2023 年 11 月 25 日(土)19 時～21 時、ウェブ会議室において開催された。講師は志村直茂様(BHN テレコム支援協議会・参与、元日本電気システム建設)、演題は「災害時に活躍するバックパックラジオ」であった。世界各地で起きる災害発生時に、あらゆる情報通信手段が使用できない時でも、情報発信ができる安価で持ち運びができる放送局「バックパックラジオ」の話であり、活発な議論で時間を忘れて楽しく有意義なウェブサロンとなった。講師を引き受けていただいた志村様には深く感謝の意を表します。
　主な話題を以下に示す。
・特定非営利活動法人(認定 NPO 法人)BHN テレコム支援協議会(以下、BHN)は、情報通信も Basic Human Needs(生活基盤を構成する要素＝衣・食・住)であるとの信念のもと、1992 年 9 月に設立された。
・最初の支援活動は 1992 年～1994 年、チョルノービリ原発事故で被災された方々を支援するため、オブニンスクとモスクワ間、約 120km のマイクロ波ネットワーク回線の構築、病院への医療情報システム及びテレビ会議システムの導入などであった。
・BHN の主な活動は、①生活向上のための支援活動(社会開発)、②緊急時の人道支援活動(緊急人道支援)、③人を育てる支援活動(人材育成)である(下図左)。



・生活向上のための支援活動(社会開発)として、ミャンマーのカレン州・モン州における紛争被害者を対象とした住居電化及びコンピュータ教育設備を構築し、現在も継続中で

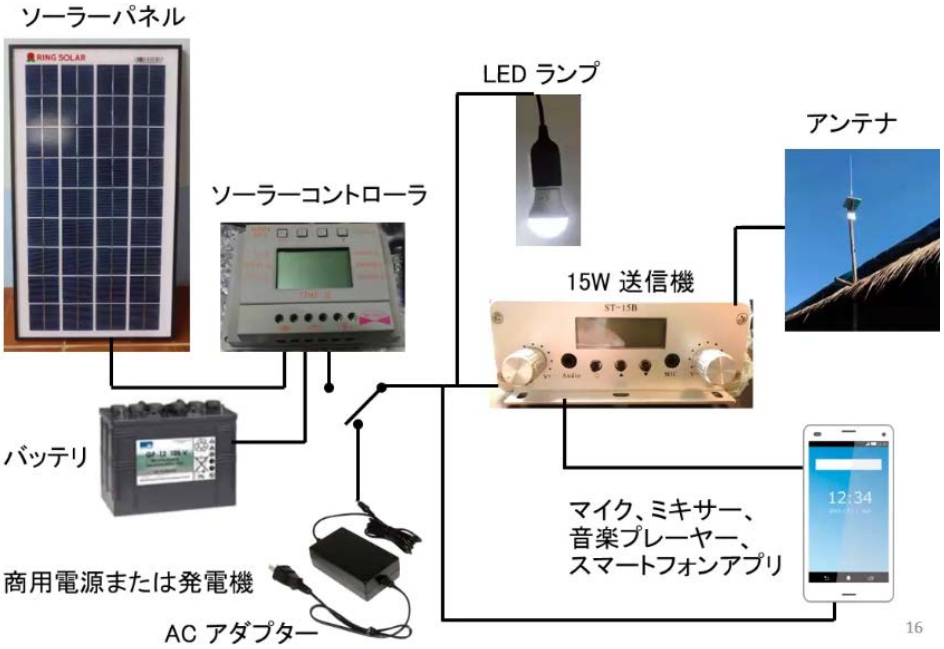
ある(上図右)。緊急時の人道支援活動(緊急人道支援)としては、熊本地震、ハイチ地震、スマトラ沖地震への支援などがある(下図左)。人を育てる支援活動(人材育成)としては、下図右のような支援をしている。ミャンマーの住居電化やハイチの難民キャンプの CA システムでは街路灯も設置したため、治安が格段に良くなったとの謝意もあった。

・バックパックラジオのアイデアは若手社会人たちのプロボノチームである Mobile Radio Station によって発案された。同チームは 2014 年 2 月に世界銀行が主催した防災・減災ハッカソン Race for Resilience をきっかけに誕生し、電機メーカーに勤めるエンジニアを中心に構成されている。その後、FM わいわい(阪神・淡路大震災をきっかけに放送開始)やインドネシアコミュニティ放送協会(JRKI：ジャルカイ)とのパートナーシップ、さらには BHN の技術者が改良を加えることによって途上国での実用化に至っている。

・災害発生時、スマホやテレビは電源問題等のため使用できず、手軽で迅速に対応可能なラジオ放送ができるよう、バックパックラジオが開発された。

・「いったい何が起きたのか」「どこで何が手に入るのか」「いつ復旧するのか、どう立ち直れば良いのか」など、混乱する時期に、正しい情報と心安らぐ音楽、そして日常風景を伝えることは、生き直すための希望を届けることでもある。

・バックパックラジオは、FM 送信機(15W)とアンテナ、ソーラーパネル、バッテリーで構成(下図)されており、マイクや専用のスマホアプリを使ってラジオ放送を始めることができる。電源が使用できれば、送信機とアンテナだけ運べばよい。設置時間は 30 分程度で、子どもや女性でも使用可能である。放送範囲は 2～3km、機材費は約 500 ドルであり、送信機以外は一般的に現地調達可能である。



・ラジオ放送の基礎知識からバックパックラジオの組立・放送までを学ぶワークショップをインドネシアで開催した(下図)。ムラピ山(活火山)周辺の 7 つのコミュニティラジオ局スタッフが参加し、災害放送だけでなく、平時に伝統舞踊の中継などにも使用できるのではないかなど、今後の活用について意識合わせが行われた。

・BHN は世界コミュニティ放送連盟に加盟しており、現在、フィジー、トンガ、バヌアツにおける女性主体の情報提供へのバックパックラジオの導入について検討している。
・試験放送では、地域の人達、学校、子どもたちにも参加してもらう。方言なども(災害時には)効果的であり、放送内容についても十分に考慮・検討する必要がある。

質問・意見は非常に活発で絶え間なく続いた。以下、質問の一部を抜粋するが、回答は参加者の特権として省略する。
・日本国内での適用はどうか。町内会で使用したいが可能か。
・日本では防災無線が幅広く導入されているが、それとの関係はどうか。
・ラジオを知らない世代や持っていない家庭が多いが、どのように普及すれば良いか。
・FM 放送ではなく、AM 放送は考えられないか。
・海外における無線・放送免許等はどうなっているか。
・耐久性はどうか。故障時はどのように対処するか。
・楽しい番組になっているか。
・宗教色の強い番組などを放送することはあるか。
・世界各地の案件発掘はどのようにしているか。
・ウクライナ、ガザなどの復興時に提供できないか。
・災害時等で、BHN の支援をお願いする場合、どうすれば良いか。
・BHN の広報はどうしているか。国境なき医師団のように、一般の人達に知られるようになれないか。
・BHN 及びバックパックラジオの資金面はどうなっているか。

このように、真にウェブサロンの雰囲気であり、今後とも皆様のご参加をお願いいたします。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 111 号を発行することができました。今回は当会の石井特別顧問から「ゼロからのソフトづくり余話(その 3)」の特別寄稿をいただくとともに、海外グラフィティ、俳柳紀行のご寄稿継続をいただき、誠にありがとうございます。

また、第 21 回 ICT 海外情報ウェブサロンは 2023 年 11 月 25 日(土)19 時～21 時、ウェブ会議室において開催されました。講師は志村直茂様(BHN テレコム支援協議会・参与、元日本電気システム建設)、演題は「災害時に活躍するバックパックラジオ」であり、楽しく有意義で活発な議論がありました。講師を引き受けていただいた志村様には深く感謝の意を表します。

会報第 108 号から当会会報配信先の皆様によるメッセージリレーを開始いたしましたが、今回もメッセージをいただき、誠にありがとうございます。今後も、「私の海外とのかかわりなど」につきまして別途、五十音順にメッセージのご依頼をいたしますので、ご多忙のこととは存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

これまでのご協力に改めて心より感謝するとともに、当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。
https://ictov.jimdo.com/コメント/

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)